

高崎経済大学地域科学研究所 ニュースレター No.4

目次

- 新規事業報告① 連携公開講座 (1)
- 新規事業報告② 地域めぐり (7)
- 新規事業報告③ 地元学講座 (9)
- 新規事業報告④ 地域経営セミナー (12)
- 公開講演会報告 (14)
- 所員刊行図書紹介 (16)
- 学生特派員レポート (17)
- 地域科学研究所動静 (28)
- 編集後記 (29)

《新規事業報告①》 連携公開講座

高崎経済大学の公開講座は、1977(昭和52)年に附属産業研究所が開催して以来、実施主体は変更しながらも、昨年度まで32回を数える市民向け行事として定着しています。そして、市民の皆様からの「もっと講義を聴きたい」「平日の夜では出席できない」というご意見に応えるため、今年度から、従来の公開講座に加え、土曜日の昼間に、高崎市の中心部にある高崎市中央公民館を会場に「高崎経済大学連携公開講座」を実施することになりました。

実施初年度の講座内容は、右表のとおりです。5人の地域科学研究所員が、それぞれの専門分野について講じ、受講者は希望する講義に申し込んで出席する形式で実施しました。

盛夏の時期の実施にもかかわらず68名の方が受講され、各講義の平均出席者数は39名でした。

受講者アンケートによれば、従来の公開講座の受講経験のない方が受講者全体の約3分の1となり(第1回の受講者46名中14名)、過半数(同27名)が「土曜昼間の開催がよい」との感想を寄せています。

講義日	講師	講義テーマ
6/18 (土)	河藤 佳彦 所員	地元産業が実現する 地方創生
6/25 (土)	増田 正 所員	18歳選挙権と選挙制 度改革
7/30 (土)	矢野 修一 所員	インフレーションと デフレーション
8/ 6 (土)	西野 寿章 所員	住民参加の電化物語 -戦前,戦後における 山村電化史と今日的 評価
8/30 (土)	米本 清 所員	地方都市の今後:東京 一極集中は止まるか

時間：13時30分～15時

場所：高崎市中央公民館視聴覚集会室

受講者アンケートの結果は、次ページのとおりです。



第1回（2016年度）連携公開講座アンケート調査結果集計報告

○開講日ごとに申込者が異なるため、各回終了後、アンケート調査を実施した。

○問6以降は、初めて回答する受講者のみ回答するようにしたが、

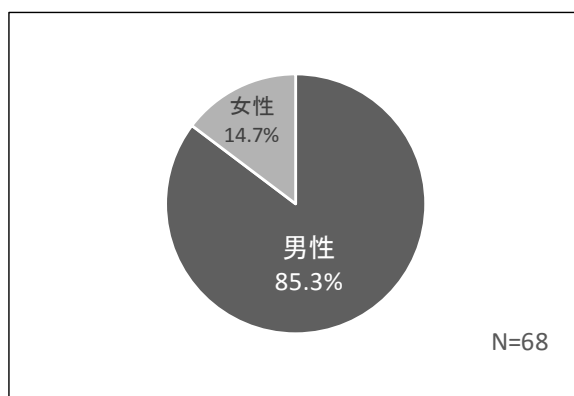
複数回回答している受講者もいるため、最も出席者の多かった6月18日の回答を集計。

のべ出席者数 218人

[有効回答数：191人（回収率：87.6%）]

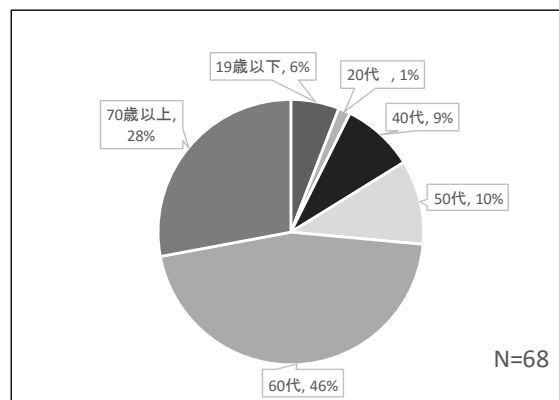
問1. 性別（受講者全体）

男性	58人
女性	10人
合計	68人



問2. 年齢（受講者全体）

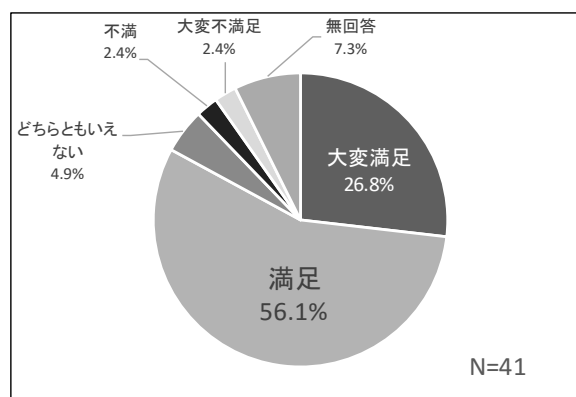
19歳以下	4人
20代	1人
30代	0人
40代	6人
50代	7人
60代	31人
70歳以上	19人
合計	68人



問3. 本日の満足度〈各開講日（5日間）の平均〉

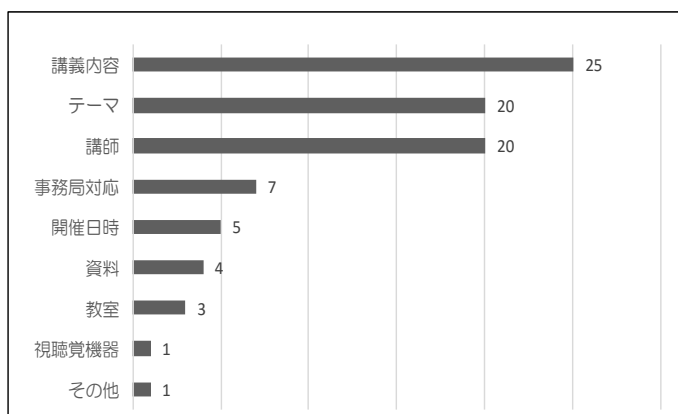
大変満足	11人
満足	23人
どちらともいえない	2人
不満	1人
大変不満足	1人
無回答	3人
合計	41人

(小数点以下切上げ)



問4. 問3で「大変満足」「満足」とお答えいただいた方（複数回答可）〈各開講日の平均〉

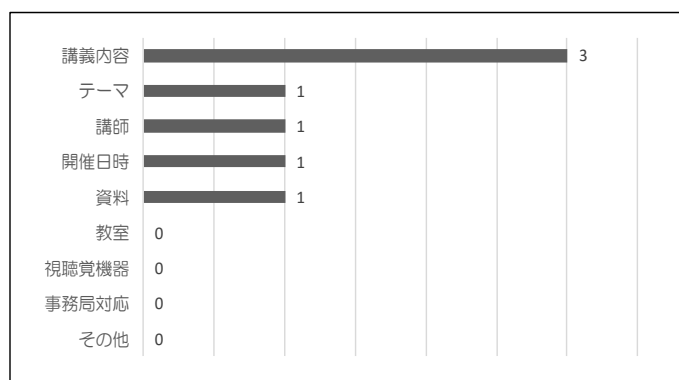
講義内容	25人
テーマ	20人
講師	20人
事務局対応	7人
開催日時	5人
資料	4人
教室	3人
視聴覚機器	1人
その他	1人



*自由記述の内容：無料で大学教授のお話がきけたこと、講師の熱意、初めて勉強の内容でした

問5. 問3で「どちらともいえない」「不満」「大変不満足」とお答えいただいた方〈各開講日の平均〉

講義内容	3人
テーマ	1人
講師	1人
開催日時	1人
資料	1人
教室	0人
視聴覚機器	0人
事務局対応	0人
その他	0人

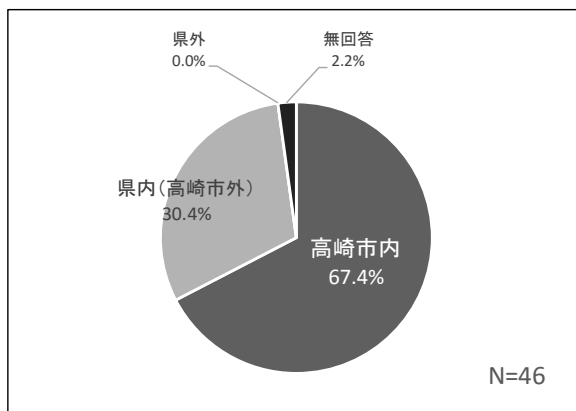


*自由記述の内容：開催日時（土曜日でも仕事が入る）、時間が足りない

以下は、初回（6月18日）の受講者の回答です。（問12を除く）

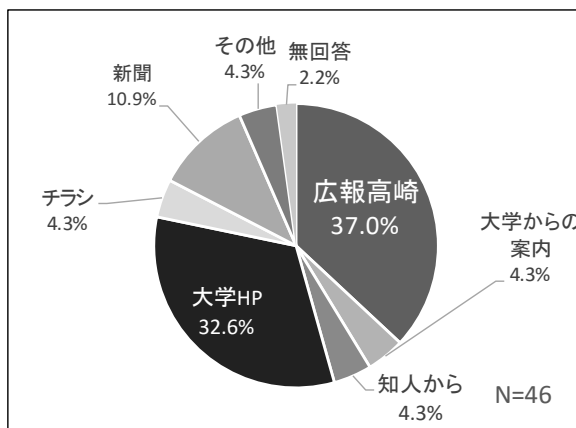
問6. 居住地

高崎市内	31人
県内（高崎市外）	14人
県外	0人
無回答	1人
合計	46人



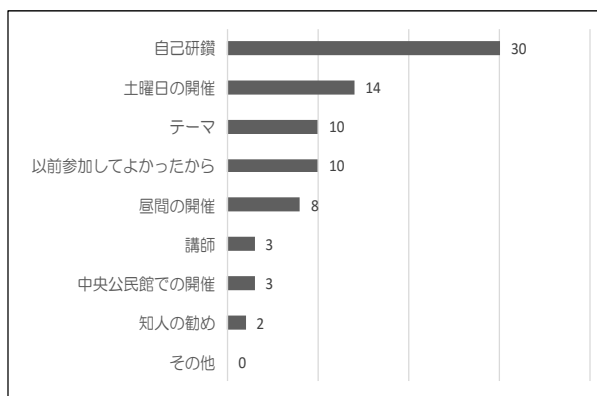
問7. 本講座を知ったきっかけ

広報高崎	17人
大学からの案内	2人
知人から	2人
大学HP	15人
チラシ	2人
新聞	5人
その他	2人
無回答	1人
合計	46人



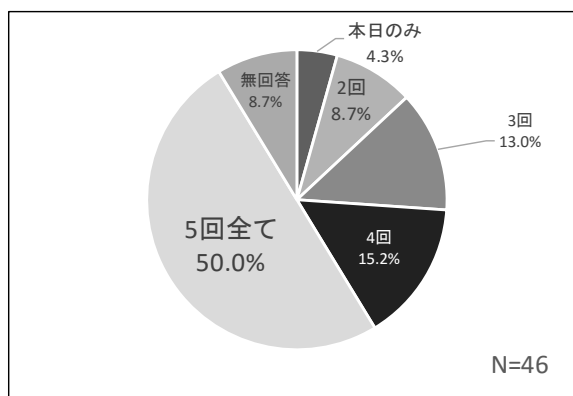
問8. 受講理由（複数回答可）

自己研鑽	30人
土曜日の開催	14人
テーマ	10人
以前参加してよかったから	10人
昼間の開催	8人
講師	3人
中央公民館での開催	3人
知人の勧め	2人
その他	0人



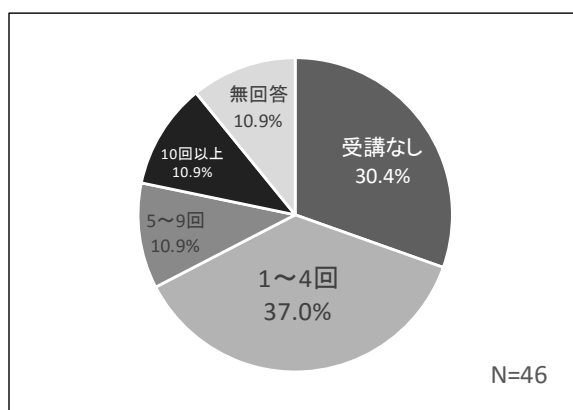
問 9. 受講予定回数

本日のみ	2人
2回	4人
3回	6人
4回	7人
5回全て	23人
無回答	4人
合計	46人



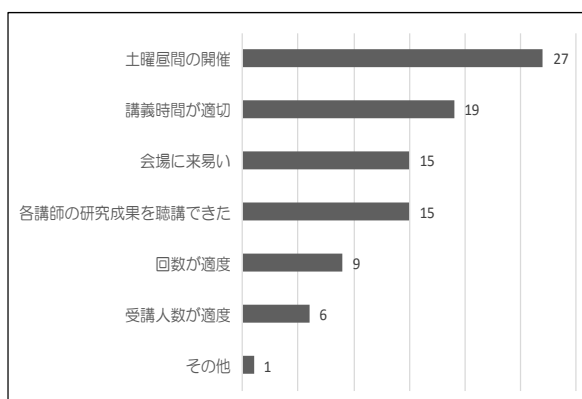
問 10. これまでの秋季公開講座の受講回数

受講なし	14人
1~4回	17人
5~9回	5人
10回以上	5人
無回答	5人
合計	46人



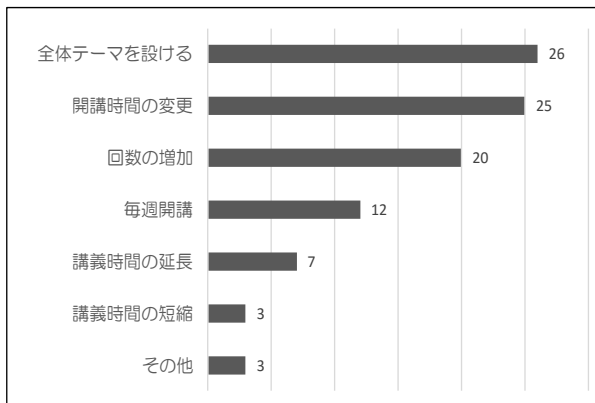
問 11. 中央公民館での講座開催に対する感想 (複数回答可)

土曜昼間の開催がよい	27人
講義時間が適切	19人
会場に来易い	15人
各講師の研究成果を聴講できた	15人
回数が適度	9人
受講人数が適度	6人
その他	1人



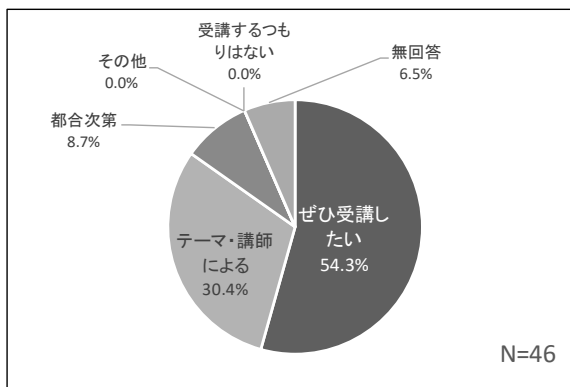
問 12. 改善すべき点（複数回答可）＜全開講日（5日間）の回答の合計＞

全体テーマを設ける	26人
開講時間の変更	25人
回数の増加	20人
毎週開講	12人
講義時間の延長	7人
講義時間の短縮	3人
その他	3人



問 13. 来年度以降の中央公民館での講座の受講

ぜひ受講したい	25人
テーマ・講師による	14人
都合次第	4人
受講するつもりはない	0人
その他	0人
無回答	3人
合計	46人



《新規事業報告②》 地域めぐり

身近にありながら市民が知らない、地域の歴史、現状そして未来について、現地見学を交えて学習する「地域めぐり」を実施しました。

◎第1回地域めぐり「高崎市の水を知る」

第1回の地域めぐりは、7月26日(火)に「高崎市の水を知る」というテーマで、西野寿章地域科学研究所長(地域政策学部教授)を講師に実施しました。

高崎市の水道は、全国で5番目に早く敷設され、その水は大変おいしいという評価を受けています。烏川から引いた水を浄水場で濾過し、上水道に送るしくみを見学するとともに、水源地の森を訪ねて、「高崎のおいしい水」がどのように生まれているのかを実際にたしかめ、あわせて地域の実態と歴史を学びました。

当日は、あいにくの雨模様でしたが、『広報高崎』や本研究所のwebサイト等を通じてこの企画を知った方々21人が参加されました。

若田浄水場では、まず、浄水場の職員から、上里見町の春日堰から取り入れた烏川の水を約20時間かけてきれいな水にしているという工程について説明を受けました。その後、水の送られる順序にしたがって場内を回り、地形の高低差を利用した自然流下方式により、水を送り出す動力費がほとんどかからないこと、また、薬品を使わずゆっくりと濾過する「緩速濾過方式」により、非常に良質の水が得られることなどを実際に歩き、目で見て確認しながら学びました。



<若田浄水場で濾過の仕組みを学ぶ>

昼食には、高崎市倉渚支所の会議室を借りて、倉渚四季の味わい研究会の作ったお弁当をいただきました。支所に隣接する道の駅「くらぶち小栗の里」の食堂で出される倉渚地域の郷土料理は、同研究会のみなさんによるものです。ニジマスの唐揚げをメインに、季節の野菜などをふんだんに使ったおいしいお弁当でした。

午後は、はまゆう山荘で、倉渚支所長から、倉渚地域の現状について説明をしていただいた後、はまゆう山荘の近くに広がる烏川の水源地(ブナ、ミズナラなど)を見学しました。



<はまゆう山荘にて>

帰路は、計画段階で中止された倉渚ダムの建設予定地を車中から見ながら、日本近代化の父と呼ばれる小栗上野介の墓がある東善寺に寄りました。小栗上野介は、権田村を知行地とし、幕末期に外国奉行や勘定奉行、陸軍奉行を歴任、横須賀製鉄所の開設に尽力するなどの業績を残しましたが、西軍(討幕軍)により、無実の罪で斬首されました。東善寺では、その墓を見学するとともに、遺品や関係する品々を展示した宝物館・本堂を見学しました。

1日中傘が手放せない天候でしたが、参加者には、水をテーマに取り上げたこと、コース、講師の解説、昼食等全般にわたり、満足していただけたようです。

コース：大学－若田浄水場―道の駅「くらぶち小栗の里」(昼食)－はまゆう山荘－倉渚ダム建設予定地《車中見学》－東善寺－大学

参加者数：21人



<小栗上野介の胸像（東善寺）>



<出発前の説明>

◎第2回地域めぐり

「『すまいるーぷ』をめぐる」

第2回の地域めぐりは、11月8日（火）に「『すまいるーぷ』をめぐる」をテーマに実施しました。

一般社団法人「ぐんま食品リサイクルすまいるーぷ協議会」（すまいるーぷ協議会）は、日本で初めて地域で立ち上げた“食品リサイクルループ”です。地域の中で食べ物を循環させる輪（ループ）を作り、循環型社会の実現を目指すことを目的とし、地元で出た食品廃棄物から作った飼料を地元の畜産業者がえさとして牛や豚に与え、作られた肉を地元で消費することに取り組んでいます。同協議会の会長を務める大宮 登所員（地域政策学部教授）を案内役に、広瀬雅美協議会事務局長、参加団体から株式会社群成舎の芝崎勝治社長にもご同行いただきました。

まず、学内の教室で、「すまいるーぷ」の活動について大宮所員から説明があり、参加団体である高崎高島屋の担当者から、青果売り場から出される野菜くずリサイクルの取組みについて解説をしていただきました。

その後、高崎市役所の食堂で昼食をとった後、実際に食品廃棄物を集めるしくみや食品廃棄物から飼料化を行っている現場、その飼料を食べて育った牛・豚・鶏を原料に作られた食品が店頭に並べられている様子を見学しました。

最初に訪ねたのは、安中市にある IRM 株式会社です。専用車両“すまいるーぷ 1号・2号”で運搬された食品廃棄物を飼料化するプラントで、野菜くずや乾麺（インスタントラーメン）、ラスク生産時に廃棄された菓子粉などを飼料にしています。価格の安い輸入飼料が一般に流通している現状では、経営的に厳しい時期もあったそうですが、自治体が受け入れるゴミの量が減少し続けていること、飼料の国内生産は将来的には価格の安定が期待できることなどを背景に、食品リサイクルを重視しようという政策の中で目先にとらわれずやっていきたいと抱負を語ってくださいました。



<集められた食品廃棄物>



〈バケツ一杯からリサイクル〉

高崎市内に戻り、すまいるーぷの飼料で育った鶏が産んだ卵を使っている有限会社三喜鶏園（卵太郎）、牛や豚を原料に作られた肉・ハム類を販売している株式会社フレッセイ小鳥店を見学しました。フレッセイでは、バックヤードに入れていただき、野菜くずが集められている様子も見せていただきました。

ところで、この日の昼食は、高崎市役所の地下食堂「はくもくれん」で「奇跡の給食」メニューをいただきました。すまいるーぷ協議会は、高崎市教育委員会と連携して学校給食のリサイクルと材料の地産地消、さらには子供たちの食育にも取り組んでいます。その活動内容は、レシピとともに『高崎市 奇跡の給食』として出版されていますが、「はくもくれん」では、同書で紹介されているメニューが日替わりで提供されています。参加者は、「今の給食はおいしいね」と自分たちの小中学校時代も振り返りながら味わっていました。



〈当日の「奇跡の給食」メニュー〉

また、当日は、地域政策学部大宮ゼミナールの学生が同行し、協議会に参加している団体について調査した内容をバスのなかで説明してくれました。彼らは、昼食時や見学の際にも参加者からの質問に答えるなど、市民のみなさんと学生のよい交流の場にもなりました。

最後になりましたが、ご多忙にもかかわらず事前の調整や当日の訪問・説明にご対応くださったすまいるーぷ協議会のみなさんにあらためてお礼を申し上げます。

コース：高崎市役所（昼食）－IRM（株）－
（有）三喜鶏園（卵太郎）－（株）
フレッセイ小鳥店

参加者数：30人（学生9人を含む）

《新規事業報告③》 地元学講座

「地元学講座」は、市民の皆様が関心を持っておられる高崎市の歴史や民俗、現状の問題や課題などを市民の皆様と本学の教員、学生がともに考えていく催しです。今年度は、「長野堰用水」（長野堰）の研究に取り組む「長野堰を語りつぐ会」のみなさんに、日頃の研究成果を語っていただきました。

「長野堰がなければ高崎の街はなかった」と言われるほど、長野堰は、高崎の成立に深くかかわっています。烏川と井野川にはさまれているながら水に恵まれない台地であった高崎は、長野堰が開削されたことで耕作が可能になり、また、都市として発展してきました。「長野堰を語りつぐ会」のみなさんは、この長野堰に光を当て、その歴史や役割について研究を続ける一方で、長野堰を広く伝える活動にも力を入れています。

◎第1回地元学講座

「長野堰の開削と高崎城下の成立」

第1回地元学講座は、7月27日（水）に本学を会場に開催しました。江戸時代の高崎の地形や街並みを再現しその中に長野堰の流れを示した、会員手作りのジオラマや資料を展示し、その歴史や意義について発表していただき、コーディネーターの大島登志彦地域科学研究所員（経済学部教授）からは、今後の活動の展開についての期待が述べられました。

ジオラマの各部を指し示しながら、また、作成時の苦労なども交えて説明をしていただけたことで、参加者は、より具体的なイメージを持つことができた大変好評でした。

研究発表：長野堰を語りつく会

コーディネーター：

大島登志彦地域科学研究所員
（経済学部教授）

参加者数：57人



<長野堰を語りつく会会員による説明>



<長野堰を語りつく会作成のジオラマ>

◎第2回地元学講座

「長野堰用水主要施設をめぐる」

好評だった第1回を受けて、第2回地元学講座では、実際に長野堰の様子を上流から訪ねようと、11月29日（火）に開催しました。直前に、長野堰の「世界かんがい施設遺産」登録が決定し新聞各紙で報道されたこともあり、定員一杯の参加者を得て大学後援会のバス2台がほぼ満席となりました。

長野堰は烏川を主たる水源にしていますが、榛名湖の水も利用しています。古くは、高崎藩が烏川の水量を補うために榛名湖の水を引こうと計画したものの、それ以前から榛名湖の水に頼ってきた吾妻郡岡崎村の反発を受け、断念した経緯があるそうです。今回の見学は榛名湖畔からスタートしましたが、長野堰の開削の歴史は水争いの歴史でもあることを確認しました。

一方、烏川からは、本郷にある頭首工で取水しています。烏川の流れを二手に分け、一方を長野堰に取り入れているのです。ここから、長野堰は小堀川・榛名白川の流れの下をくぐって（サイホン）市街地に向かいますが、今回は、頭首工から、沖町で流れが姿を現すまでの区間を歩いてたどりました。

沖町でバスに戻り、長野堰の紹介では必ずと言っていいほど写真が出る「円筒分水堰」に向かいました。長野堰の開削の歴史は水争いの歴史、と書きましたが、円筒分水堰も下流の地区に公平に分けるために工夫されたものです。参加者は、分水された流れを指さしながら、そのしくみを興味深そうに見学していました。

今回の地元学講座も、「長野堰を語りつくす会」の方が、現地で、また往復の車中で詳しく解説をしてくださいました。開削・改修工事を記録した碑が市中心部にもあるという説明には、長野堰と高崎とのかかわりの深いことをあらためて実感しました。講師として同行して下さった中嶋 宏会長と会員の西山 保さんにあらためてお礼を申し上げます。

54年ぶりという11月の降雪の後で寒さが心配されましたが、榛名湖畔の気温は8度。わかさぎフライとうどん鍋の昼食で暖を取り、若干風は冷たいものの天候に恵まれた気持ちのよい1日でした。



<榛名湖畔で江戸時代の水争いを聞く>



<長野堰榛名湖水門>



<長野堰頭首工（烏川）>



<長野堰頭首工で記念撮影>



<“暗渠”にはこのような蓋が>



<榛名白川サイホン (川の下をくぐる)>



<円筒分水堰>

コース：榛名湖畔（①沼尾川＜榛名湖余水吐水口＞・壺つ岩 ②榛名湖から長野堰への取水口）－（昼食）－長野堰頭首工－（徒歩）－小堀川サイホン・榛名白川サイホン－円筒分水堰

参加者数：57人

* * * *

《新規事業報告④》 地域経営セミナー

地域経営セミナーは、地域科学研究所の前身の1つである地域政策研究センターが政策評価をはじめとした自治体職員向けの研修講座を開講していたことを継承する事業です。自治体職員の資質向上に寄与することを目的に、行財政分野の専門家による講座を今年度から開始しました。

◎2016年度地域経営セミナー

「これからの行政運営と地域づくり

－地方分権的地域自治へのアプローチ

第1回となる2016年度地域経営セミナーは、10月14日（金）に、行政学を専門とされている国際基督教大学教養学部教授の西尾隆氏、財政学を専門とされている京都大学大学院経済学研究科教授の諸富徹氏を講師に迎え、高崎市の後援を得て開催しました。高崎市、群馬県内の自治体の職員を中心に、57人の参加がありました。

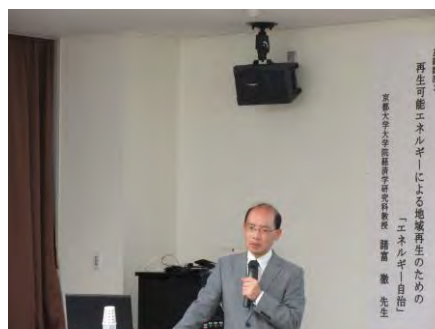
西尾 隆先生には「分権時代の地域づくり－計画・参加・ひと－」と題して、講演いただきました。西尾先生は、まず最初に「地域はつくるものか、できるものか？」と投げかけられ、有機的な地域づくりには、より「発生的」で「分権的」アプローチが必要であり、個性的な「まちづくり」は画一的日本型都市計画と異なることに触れられ、コミュニティ形成も「設計」ではなく、「発生」するのを待つべきか？と投げかけられました。地方分権改革の歴史を振り返りながら、機関委理事務の廃止や市町村合併によって団体自治は拡充されたものの、住民自治の向上が図られたかどうかには疑問があるとされ、国と地方自治体が対等な関係となったゆえに、辺野古移転をめぐる国と沖縄県の紛争は自発的で個性的な地域づくりの運動の一つと語られました。次いで、自治体計画と市民参加について語られました。市民が自治体計画に参加する意義は、自治体計画を学習して提案し、

交流を図りながら、計画を評価する機会であると説明され、1999年から2001年に実施した「みたか市民プラン21会議」を紹介され、市民協働による地域ガバナンスの必要性を指摘されました。そして、「制度改革+運動」、「計画+思いつき」、「人間+ヒト」による多文化化が、これからの地域経営に必要だと論じられました。



続いて、諸富 徹先生には「再生可能エネルギーによる地域再生のための『エネルギー自治』」と題して講演いただきました。東日本大震災時における原発事故を契機として再生可能エネルギーの必要性が高まる中で、北海道下川町における木質バイオマスエネルギーを利用した地域暖房構想や岡山県真庭市が側面支援をしている企業によるバイオマス発電事業、岡山県西粟倉村における熱供給会社の創設の動きなどを紹介いただき、「自分たちが消費するエネルギーを地域資源を用いて自ら創り出す」こと、この目的のために「域外の大企業に頼るのではなく、自治体、もしくは地元企業が中心となって地域でエネルギー事業体を創出して、それまで「化石燃料費支出として域外に流出していた所得を地域資源である木質バイオマスへの支出に置き換えることによって所得が地域に留まるようになり、実質所得を向上させ、「地域資源の活用による燃料生産からエネルギーの生産、流通、消費、そして廃棄物処理のプロセスで関連産業が地域に発生し、地域に所得と雇用が生み出されると「エネルギー

自治」の本質について語られました。そして、長野県飯田市における分散型発電事業への取り組みなどを紹介され、戦前、多くの都市が電気事業を市営企業の形態で営み、収益を一般財源に繰り入れていた歴史やドイツのシュタットベルケ(自治体出資の公益事業体)に学びつつ、税収増が期待できない今後の自治体経営において、税収以外の財源を獲得できるエネルギー分野の公益事業体の創設は、真剣に検討されるべき地域経営の選択肢だと述べられました。



日時：2016年10月14日(金)

13時30分～16時30分

場所：高崎経済大学7号館72A・B会議室
プログラム：

1. 開会挨拶 (西野寿章 地域科学研究所長)
2. 学長挨拶 (石川弘道 高崎経済大学学長)
3. 来賓挨拶 (兵藤公保 高崎市副市長)
4. 基調講演1
「分権時代の地域づくり
-計画・参加・ひと」
西尾 隆 国際基督教大学教授
5. 基調講演2
「再生可能エネルギーによる地域生成のための『エネルギー自治』」
諸富 徹 京都大学大学院教授
6. ディスカッション
パネラー
西尾 隆 国際基督教大学教授
諸富 徹 京都大学大学院教授
コメンテーター

佐藤 徹 地域政策学部教授
 岩崎 忠 地域政策学部准教授
 司会
 西野寿章 地域科学研究所長



◎2016 年度第 2 回公開講演会

第 2 回公開講演会は、2016 年 10 月 21 日（金）、水戸市役所市長公室交通政策課長の須藤文彦氏を講師にお招きし、「地元を作ろう—人生を豊かにする地元たち」と題してご講演いただきました。市役所での職務のかたわら、まちづくり団体の水戸市政策研究会などで様々な「課外活動」を実践しておられる須藤氏から、「地元」という言葉は出身地のみならず、自分が関わりや愛着を持つ土地をさす言葉でもありうることを、そのような「地元」を複数持つことで人生を豊かにすることができるということ、水戸市や高崎市における豊富な事例をお引きいただきながら、自作の紙芝居を用いたユニークな形式でお話いただきました。

森 周子所員（地域政策学部准教授）



公開講演会報告（第 1 回～第 3 回）

◎2016 年度第 1 回公開講演会

第 1 回公開講演会は、2016 年 6 月 3 日（金）、岡山商科大学経営学部・長田貴仁教授をお迎えし、「『小粒な地方創生』に死角はないか」と題する講演をしていただきました。内容は問題提起的とも呼べるもので、地方都市もグローバル化の波の中では決して安住できる場所ではなく、今のままの内向きの地方創生（若者の地元志向や安定志向など）では、やがて地方経済が衰退してしまうおそれがあると主張されました。したがって、地方にありながらもグローバルな視野をもった自立型産業の創出が急務であり、たとえば和歌山の島精機製作所（制御横編み機でかなりの世界シェアを誇る）のような企業が各地方に創出されることが望ましいのではないかというお話を展開されました。最後に、真の意味での地方創生のためには、「井の中の蛙」になることなく、広い視野を持ち、自ら職を創造するような気概が必要であると学生たちに述べられました。

井上真由美副所長（経済学部准教授）

◎2016 年度第 3 回公開講演会

皆さんよくご存じのように、現在の日本において企業の「数」を見れば、中小企業が 99% 以上を占めています。「雇用」に目を向ければ、労働者全体の約 7 割を中小企業が雇っています。つまり、中小企業は日本経済の大きな担い手であり、中小企業が元気にならないと日本経済も元気になりません。

ところが日本の中小企業は、長引くデフレ、不透明な経済環境のなか、数多くの経営課題に直面し、苦しんできました。大手企業からの厳しいコストダウン要求、設備の老朽化、人手不足、経営者の高齢化、事業承継などです。アベノミクスの恩恵が中小企業に届いているとは、とても言えません。

こうした状況下、2016 年 11 月 9 日 (水)、本学図書館ホールで「日本の中小企業経営の課題と展望」と題する講演会が行われました。まさに時宜を得たテーマです。講師の大谷武彦氏は 1965 年に高崎経済大学を卒業後、大手建設会社で海外勤務に関わり、その後は大ヒットした「筆まめ」をはじめ IT 事業で有名な(株)クレオの社長・会長を歴任され、現在はシニア人材の活用と中小企業支援を目的とするコンサルティング会社の代表を務めておられます。そのかわり、2014 年度から文部科学省のスーパーグローバルハイスクール (SGH) に指定されている高崎経済大学附属高校において、SGH 運営指導委員を引き受け、次世代の育成にも関わっておられます。

講演会では事例をあげながら、「国際化時代における経済環境の認識」「方針管理の徹底、ビジョンの明示」「人的資源の洗い直し」「speed, 原理原則の重視」「社内風土の改革」などについて語っていただきました。経営とは環境の変化に合わせて経営資源の生産性を高め続けることであるが、つまるところ「人材がすべて」というのが大谷氏のメッセージです。

70 歳を過ぎ、いまだに全国各地どころか世界中を飛び回っておられる大谷氏は、講演会の最後に、現役学生と卒業生が一体となって高崎の産業の発展に貢献できないか、地域科学研究所がそのための媒体となれないかと問いかけられました。

地域科学研究所では、「高崎市製造業の地域的展開と躍動」をテーマとする研究プロジェクトが大詰めを迎えています。中小企業にとっては厳しい状況が続いていますが、それでも高崎には、創意工夫を重ね生き延びてきた地場企業が数多くあります。地域科学研究所に対する大谷氏の熱い呼びかけに応える一環として、本プロジェクトでは、高崎市の製造業の果敢な取り組みを広く社会に伝えていかななくてはならないでしょう。

矢野 修一所員 (経済学部教授)

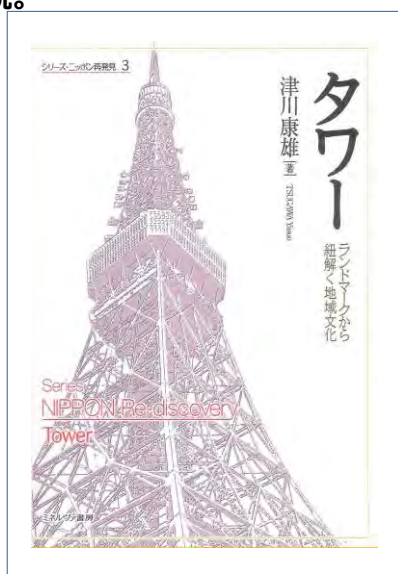


* * * *

所員刊行図書紹介

津川 康雄所員(地域政策学部教授)

津川康雄著『シリーズ・ニッポン再発見③
タワー -ランドマークから紐解く地域文化-』ミネルヴァ書房, 2016年, 2,000円+税。



本書は『シリーズ・ニッポン再発見(ミネルヴァ書房)』に含まれるもので、これまでに『マンホール』『銭湯』と続き、それぞれのテーマを通じて日本の文化や歴史を再発見しようとする企画となっています。本書では、ランドマークとしてのタワーや高層ビルの意味(ミーニング)を紐解くことにより、地域の歴史や文化を明らかにすることを意図しました。

以下、出版社の説明文を再掲します。

「日本各地にたつ、見た目も役割もさまざまなタワー。タワーは地域のランドマークとして、その地域の人びとと深く関わってきた。著者によると、ランドマークとは、空間イメージや原風景を形成し、地域アイデンティティを表象するもの。このように定義できるランドマークとして、本書ではタワーのほか高層ビルについても取り上げる。日本のタワーや高層ビルは、いつ・なぜ建てられたのか、誕生の裏側に迫り、それらから見える景色や地域、そして人びととの

関わりを見ていく。」

ポイントとしては、駅ビルや高層ビルも広義における「タワー」と捉えました。そして、タワーを「見上げる」、タワーから「見下ろす」という、タワーというテーマならではの2つの視点で説明し、前者は各タワーの建築技術、デザインにこめられた地域性などを解説、後者は各タワーから見える地域特有の風景、各タワーの立地場所の歴史・名所などに言及しました。

目次の見出しは以下のとおりです。

- 1 日本の視野を広げ文化を育んだテレビ塔
- 2 歴史と地域をみつめるタワー
- 3 庁舎は現代の天守閣か
- 4 コンベンションセンターのシンボルタワー
- 5 海や街を見渡すタワー
- 6 シンボルとしてタワーをつくる
- 7 タワー化する駅
- 8 タワービルは都市のシンボル
- 9 個性派タワー勢揃い

その他、タワー建築の祖と言われる内藤多仲や、今はないタワーなどについてもコラムで取り上げました。

純粋な学術書ではありませんが、これまで筆者が取り組んできたランドマーク研究の一環として、新たな視野を広げることができたものと思っています。

学生特派員レポート

◎佐藤英人ゼミナールのシンガポール合宿
(地域政策学部地域政策学科 3 年生)

自分にとって海外を訪れるのは、今回のシンガポール巡検で二度目の経験となります。この巡検は単なる海外旅行とは一味違い、現地まで一人で向かわないといけません。一日目にまずマーライオン前に集合するために各自の判断と責任を持って、これまで経験したことのない緊張感を味わいながら出国しました。飛行機の搭乗手続きなどを初めて自分一人で行ったので、今後海外に出かける際はスムーズに出国できる自信がつかしました。

現地を歩いて感じた日本との一番の違いは、さまざまな民族や宗教が混然一体になっているということです。確かに、看板の文字や建物の造りなど、景観や雰囲気エリアによって全く異なり、シンガポールが多文化共生社会であることを実感しました。

シンガポールの中心部は 7 つのエリアに分けることができます。行政機関が集まるシティ、ショッピングやビジネスの中心であるマリナー、オーチャードに対して、チャイナタウン(写真 1)、リトル・インディア、アラブ・ストリート、カトンは、エスニックタウンであり、それぞれ独自の文化が強く表れているエリアです。エスニックタウンを歩いていると、同じシンガポール国内であっても、まるで異国にやって来たかのような気持ちになりました。初日に訪れたチャイナタウンには、道の両脇に屋台が並ぶ歩行者天国や、ホーカーズと呼ばれるフードコートがあり、現地の方や観光客でとても賑わっていました。自分が異国の地で実際に生活をしているかのような感覚が楽しかったです。フードコートの中でも、熱帯のためなのか、想像以上に暑く、その上ずいぶんと歩き回った

ので、のどの渇きが尋常ではありませんでした。ここで飲んだフルーツジュースの味が忘れられません。好きな果物をチョイスして作ってもらったジュースは、新鮮でとても美味でした。



〈写真 1 チャイナタウンの屋台街〉

また、シンガポールの中心部だけでなく、郊外部にも足を伸ばしてみました。マリナーベイサンズ駅から MRT で 30 分程の位置にある、アン・モ・キオやビシャンという住宅地に行きました(写真 2)。数多くの集合住宅が建ち並んでおり、住民の生活感が漂っていました。戸建の住宅も見つけましたが、国土の狭いシンガポールでは住宅のほとんどが集合住宅のようです。アン・モ・キオでは集合住宅地の中にバス停が数多くあり、MRT 駅に向かうバスなどが 5~15 分間隔で走っていました。交通の面ではそれほど不便はないと思いましたが、狭い敷地に多くの住民が密集して暮らしており、窮屈な印象が強かったです。



〈写真 2 アン・モ・キオの集合住宅〉

(地域政策学部地域政策学科 3 年・伊藤裕里)

私たち佐藤英人ゼミ 2 期生は、去る 9 月上旬にシンガポール巡検を行いました。ゼミで海外に行くというのは珍しいことですが、さらに特筆すべきは「現地集合、現地解散」であった点でしょう。決められていたのは「9 月 6 日 18 時、マライオン前に集合」のみ。ホテルや航空券は全て個人で手配しました。各自で航空券を取ったはずでしたが、成田空港の出発口ビーでほとんどのゼミ生に出くわしてしまった時は思わず笑ってしまいました。

シンガポールはマレー半島の南端に位置し、人口は約 554 万人で、東京 23 区とほぼ同じ広さの都市国家です。赤道直下に位置するため、1 年を通じて高温多湿であり、私たちが訪れた時も日差しが強く、日中は外にいと汗が止まりませんでした。

シンガポールは華人、マレー系、インド系からなる複合民族国家のため、3 系統の文化が共存共栄しながらそれぞれ異なるコミュニティー（チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリート）を形成しています。そのため、シンガポールに足を踏み入ると、想像していた以上にさまざまな言語が飛び交っていて驚きました。1 つの国にたくさんの人種がいるという複合民族国家ならではの雰囲気新鮮さを抱くと同時に、英語が公用語である理由もわかった気がしました。

今回の巡検で一番印象に残っているのは、何と言ってもマリーナベイ・サンズに宿泊したことです。シンガポールのどこにいても視界に入ってくるあの「大きな船」（写真 1）が乗っているホテルに私自身が泊まれるなんて、と期待に胸を膨らませ、いざ宿泊する 26 階の部屋に入ると、自動でカーテンが開き、目の前には華やかなマリーナベイの景色が広がっていました。それからは、同室だった伊藤裕里さんと興

奮のあまり踊り狂っていた記憶しかありません。まさに、有頂天でした。また、写真にもあるように 57 階の展望台から見る夜景は、今まで見てきたどんな夜景よりも眩しくて、シンガポールがアジアのハブという地位を確立していることを暗示するかのようにも見えました（写真 2）。今でもあの夜景が脳裏から離れません。



<写真 1 マリーナベイでの食事の様子>



<写真 2 マリーナベイ・サンズからの夜景>

今までは、シンガポールに対して規則が厳しく堅い国のイメージを持っていました。しかし、実際に訪れてみると、街ですれ違う方々が気さくに挨拶をしてくださったり、「Have a nice trip!」と声をかけてくださり、今まで訪れた国の中で最も楽しい国でした。インターネットが発達し、どんな情報でも手に入れられる時代だからこそ、現地に行って自分の目で見て確かめることの意義を、改めて思い知らされました。これからもさまざまな国を訪れて、広い視野を持ち続けたいです。最後になりますが、このような貴重な機会を設けてくださった佐藤英人先生に、心から感謝いたします。

（地域政策学部地域政策学科 3 年・吉田 萌）

今回のシンガポール巡検は、まさに「百聞は一見に如かず」という諺を体現したものだだったと感じました。

最初に、シンガポールといえば、とにかく「厳しい」というイメージがあります。例えば、ガムの持ち込み・販売が禁止されていることや、たばこの吸い殻・紙屑等のポイ捨て行為にも罰金刑や鞭打ち刑が科せられています。また、公共交通機関についても日本では禁止されていない列車内や駅構内での飲食に対して高額な罰金が科せられているなど、非常に厳格な罰則が設定されています（写真1）。これらの罰則



<写真1 罰則行為を記した表示板>

は環境美化につながることから、私はシンガポール市内がくまなく綺麗であると考えていました。実際、初日から最終日まで滞在したマリナーナ地区や高島屋などの日系デパートが進出している中心商業地のオーチャード地区、ユニバーサル・スタジオ・シンガポールがあることで有名なセントーサ島は、たばこの吸い殻や空き缶はおろか、紙屑一つ落ちてない非常に清潔な場所であり、私の中のイメージ通りの光景が広がっていました。しかし先に挙げた地区以外では、たばこの吸い殻や空き缶のポイ捨てが目立っており、とても清潔とは言えない場所もありました。ここで私がシンガポールに抱いていたイメージの表と裏の部分を知ることになり、たとえ罰則を厳しくしても人々が心の内に秘めるマナーや道徳心まで律することは難しいと感じました。

次に、シンガポールといえば豊かな国というイメージがあります。ほかの東南アジアの国々と比べて高い物価、高級リゾートホテルや世界的な金融機関が数多く立地している点は、このようなイメージを作り上げる好例と言えるでしょう。実際に巡検で宿泊したマリナーナ・ベイ・サンズの最上階では、展望デッキを貸し切ってパーティーが開かれていたり、市街地では日本でめったにお目にかかれないフェラーリなどの高級車が何台も走っていたり、ホテルに併設されているショッピングモールには数多くの海外有名ブランド店がテナントとして入居していました（写真2）。渡航する前に得た情報だけでなく、現地の様子や人々の行動などを目の当たりにすることで、私がイメージしていた以上に、この国は豊かな国であるということがわかりました。



<写真2 高級ブランドが軒を連ねる

ショッピングセンターの様子>

結論としてシンガポールとは、私が抱いていた通りのイメージとそうではないイメージが混在した多様性に満ちた国であったと言えます。私の頭の中には国内外問わず、ほかにもイメージだけで判断している地域が数多くあります。今回の巡検を機に、イメージに捕らわれのままにせず、私自身で積極的に現地へ足を運び、そこでの様子を目にしたり、音を聞いたり、肌で感じたりすることで真否を確かめようと思います。

(地域政策学部地域政策学科 3年・荒木一步)

率直に言って、私はシンガポールの発展に非常に驚きました。東南アジア諸国でこれほど発展している国があるとは考えていなかったからです。この発展には大きく三つの要因が挙げられると考えました。

一点目は、鉄道網の整備と環境意識の高さです。シンガポールは国土面積が狭く、東京 23 区ほどの広さに過ぎません。そのため、国土の主要エリアは鉄道によって網羅されています（写真 1）。鉄道には MRT（Mass Rapid Transit）と LRT（Light Rapid Transit）があり、私は前者を利用しました。5 分に一本ほどの間隔で列車が往来しているのでとても便利です。法律によって飲食が禁止されており、車内や駅構内の環境維持に対して意識の高さを感じました。鉄道網の整備と環境意識の高さが、シンガポールの発展を根底から支えていると思いました。



<写真 1 MRT と LRT の路線図>

二点目は、観光資源の開発を挙げることができます。シンガポールといえばマリーナオンでおなじみですが、観光資源はそれだけではなく、市内を一望できるシンガポールフライヤー（アジア最大級の観覧車）や、高級ホテルとして知られるマリーナベイサンズの美しいライトショーなど、新しい観光資源が数多く開発されています。私は実際にそれらを見学したのですが、アジア系以外にも、多様な人種が観光客として集う光景を目の当たりにしました。

三点目は、シンガポールが多文化共生社会であることです。特に食という面で、文化の違い

を感じました。フードコートで食事を取った際、タイ料理や中華料理などを注文し、パサパサとした舌触りが特徴的なタイ米や、香辛料が効いた麺を味わいました。中でもヤングココナッツジュースは印象的でした（写真 2）。若いココナッツの実に直接ストローを挿して飲む



<写真 2 ヤングココナッツジュース>

飲料で、例えるならば、トウモロコシの芯のような味がする水といったところです。帰国後に調べてみると、この飲料は東南アジアでよく飲まれているそうです。残念ながら、私には苦手な味でしたが、日本で味わうことのできない食べ物に挑戦できたことは、多様な文化を知る上で大きな糧になりました。また、ヤングココナッツジュースを飲む中華系の人や、中華料理を食べるマレー系の人を見つけ、お互いの食文化を尊重する一面が伺えました。

今回の巡検はシンガポールの発展を肌で実感できた貴重な経験となり、一生記憶に残り続けると思います。ふだん、日本以外の国について、あまり深く考える機会がなかった私は、シンガポールを「東南アジアの発展途上国」と侮った見方をしていました。しかし、実際にその発展を目の当たりにし、大いに反省しています。やはり、外聞や伝聞のみで判断するのではなく、実際に現地に赴き、自分の目で真実を見てくることは、何にも勝ることだと痛感しました。今回の巡検をきっかけに、より多くの国を訪れて国際的な視野を広げていきたいと思っています。

（地域政策学部地域政策学科 3 年・荒木 陸）

私は今回のゼミ巡検で初めて海外に渡航しました。初めての海外にも関わらず「現地集合・現地解散」でしたので、とても不安に感じていました。当然のことながら、事前に自分たちで航空券・ホテルの予約を取り、現地の情報などを集めなければなりません。しかし、自分たちで色々調べていくうちに巡検への興味関心が日増しに高まっていきました。

さまざまな人種が集い、多種多様な文化が交錯するシンガポールは、私が経験したことのない世界でした。1日目は、「夕方6時にマライオン前で先生と合流すること」でしたので、集合時間までセントーサ島へ行くなど、シンガポールの観光スポットを巡りました。私が移動する際に利用したのは MRT (Mass Rapid Transit) という鉄道です。南北線をはじめ5路線が開通している MRT は、東京都内の鉄道のように頻りに往来しているので、市内を移動するにはとても便利です。電車の運行本数のみならず、安全性や効率性にも配慮がなされていました。たとえば、すべての駅にスクリーンドアが設置されていたり、コンピューターで管理されているので運転士がいなかったり、日本の鉄道にも参考なる点がいくつかありました。日本の鉄道は乗り心地や時間の正確さからすると世界的に素晴らしい評価を受けますが、私はシンガポールの鉄道の方が、設備が整っており素晴らしいと感じました。ひとつだけ難点を挙げるならば、座席がプラスチック製で長時間座るとお尻が痛くなります。 . . .



<写真1 ラッフルズ・プレイス駅周辺>

海外巡検ということで、事前に先生から3つの課題が与えられていました。2日目はその課題をこなすため、3つの班に分かれて行動しました。私たちの班は「中心商業地区と中心業務地区の考察」が課題です。主に4つの駅に降り立ち、その周辺を調査しました。中心業務地区と予想したラッフルズ・プレイス駅周辺は、多くの高層ビルが建ち並んでいました(写真1)。多くの企業がある中、日本の某銀行の支店を見つけたときは、世界に進出する日本企業を誇りに思いました。一方、商業地区と予想したオーチャード駅周辺は、道路の両側に多くの大型商業施設が立地し、人の往来が多と感じました。世界的に有名なブランドショップが多く建ち並ぶ中で、高島屋や伊勢丹などの日本の百貨店が出店していることに驚きました。商業施設の立地や店舗構成、来街者の多さなどから当地区がシンガポールの一大商業地であると理解しました。



<写真2
フードコート
のチキンライス>

私はシンガポール巡検を通して、世界をより広くとらえるためにも、もっと自分の目で異文化の衣食住に触れていかなければいけないと感じました。今回の巡検で特に触れることができたのは「食」文化です。フードコートで食べたチキンライスは、米がパサパサと乾燥していて、食べ慣れない私は、その米をスープで流し込まなければなりません(写真2)。私の視野をさらに広げるためには、今回の巡検で得た貴重な経験を踏まえて、他国の文化に積極的に触れていくことが大切だと思いました。

(地域政策学部地域政策学科3年・荒木 陸)

シンガポール国内では MRT(Mass Rapid Transit)が交通の要になっています。MRTには5路線があることに加え、ニュータウンには MRT 駅と連動して LRT (Light Rapid Transit)が走っています。特に後者は、郊外団地を細やかに周回するので、当地で暮らす住民の「足」となっていました。

私は都心部へ向かうために午前8時頃、チャンギ国際空港から MRT の東西線に乗車しました。タナ・メラ駅で乗り換えた際、車内には空港利用者よりも、通勤客が多く乗車していました。MRT は確かに市民にとって重要な交通手段のようです。

切符は数種類あり、乗車ごとに目的地までの料金をチャージするスタンダード・チケット、バスと鉄道兼用のプリペイド式のイージ・リンク・カード、バスと鉄道が乗り放題のシンガポール・ツーリスト・パスが販売されています。私はツーリスト・パスを利用しました。運賃を気にせず、加えて使用後はバスを返却してデポジット代金の受け取りが可能のため、市内の移動が楽にできました。

Road Name	Dist	Bus Stop Description	Road Name	Dist	Bus Stop Description
Victoria St	0.0	Bugis Stn	Tg Katong Rd	58	Tg Katong Girls' Sch
Stamford Pr	0.4	Sch		62	Bef Katong PO
Opp Blk 461	0.7		Mountbatten Rd	68	Opp One Amber
Lavender Stn	1.0			71	Katong Shop Ctr
Opp Sri Manmaha K Tp	1.7		East Coast Rd	73	Opp Boys Sq
Kallang Stn	2.2			78	Opp The Holly Family Ch
Alt Lor 1 Geylang	2.5			83	Katong Omega Apt
Alt Geylang Rd	3.1			87	Occan Apts
Mountbatten Rd	3.7	Mountbatten Voc Sch		89	Christ Meth Ch
Old Airport	4.4	Blk 39		92	Alt Dunbar Walk

<写真1 日本と表記が異なるバス停>

鉄道以外の交通手段にはバスが挙げられ、車両の豊富さに驚かされました。日本でもよく見る通常的大型バス以外に、日本では観光用に利用されている2階建てバスがシンガポールでは路線バスとして活躍しています。中には、2階建てオープンバスも導入されており、観光客のみならず市民の移動手段として使われてい

ました。シンガポールのバス停は、「経大前」のように、停留所名にランドマークを使用せずに Opp Blk 461 (Opposite Block 461)など、バスが走行する通りの名前やブロック名を停留所の名称にしています(写真1)。そのため、どのバス停から、どのバスに乗車すればよいのかわからず、乗り慣れていない観光客には敷居が高く感じました。加えて、たとえ無事にバスに乗車できたとしても、つぎに停車するバス停のアナウンスがされないで、現地の地理をよく熟知していないと乗り過ごす恐れがあります。

シンガポールにはさまざまな文化が混在し、多種多様なエスニックタウンが存在します。私はチャイナタウン、アラブストリート、カトンエリアを訪れました。モノクロームのビル群とは対照的にカラフルな装飾のエスニックタウンが印象的でした(写真2)。



<写真2 チャイナタウンからビル群を望む>

チャイナタウンではホーカーズへ行き、チキンライスを食べました。鶏肉のつるんとした舌触りがよく、チリソースを加えて食べてみると、さらに美味しく感じました。

シンガポールは多民族国家ですが、民族間の対立を目にすることはありませんでした。それは中国語・英語・マレー語・タミル語という4つの公用語の中でも、英語は民族の別を問わず、ほとんどの国民が理解できるためでしょう。たとえ人種や民族が異なっても、共通の言語は、円滑な意思疎通には不可欠であり、共通

言語こそ、多民族国家シンガポールを成立させるための重要なコミュニケーション・ツールであると改めて実感しました。

(地域政策学部地域政策学科3年・村山美咲)

今年の海外巡検は本ゼミ生10名と佐藤英人准教授とともにシンガポールを訪れました。日本を出発する前の時点では、全日程雨の予報でしたが、到着した日の午前10時ぐらいからは快晴でかなり蒸し暑くなりました。多民族国家であるシンガポールには公用語が英語を含め4言語あり、地下鉄（以下MRTと略す）やホテルなどの標識やパンフレットには多言語対応表記がされていました。英語表記があれば心配ないと思い、空港から初日のホテルまで料金的にお値打ちなMRTを利用してみました。ところが、乗り慣れない異国の地ということもあって、電車を間違えてしまったのです。不安が募る私たち。すると、私たちの状況を察知したのか、現地の人々が目的地までの行き方を親切に教えて下さいました。何かと世知辛い日本とは違い外国人を受け入れ、助けようとする姿勢に感銘しました。

シンガポールでは車よりもMRTやLRT、バスといった公共交通機関が整っており、各駅での乗り換えがとても楽でした。しかし日本と異なり、電車内での飲食やたばこが法律で禁止されていました。違反すると罰金として500ドル（日本円で約3.5万円）を徴収されます。市内でもポイ捨てなどが罰金の対象とされ、環境整備を罰則で行っていると感じられました。ただし、例外的な場所もありました。市街地を少し外れた一部の地域では街路にゴミが散らかり、異臭がしていました。特に休憩がてらに入ったある商業施設では、臭いと評判のドリアンが玄関先で売られ、なおかつ、そのフード

コートは暗く汚かったです。日本人とシンガポール人の環境美化に対する意識を比較すると、日本人はどこであっても清潔に保とうとする意識が強く、改めて私たち日本人が持つ美的感覚の素晴らしさに気づきました。

シンガポールの道路交通システムといえば特徴的なのがERP（Electronic Road Pricing）です（写真）。日本のETCと似ていますが、郊外から都心に乗り入れる車に対して時間帯によって課金し、都心の交通渋滞を抑制するシステムです。ERPが機能しているためか、道路はあまり混んでおらず一般車よりもタクシーをよく見かけました。2日目の班行動では、このERPについて調べるため、市内を約1.7万歩も歩き足が折れそうになりました（ちなみにシンガポールへ行く方はぜひ帰りの空港で無料のマッサージ機を利用してほしいです）。



<写真 ERPのゲート>

今回の巡検では、2日目にマリーナ・ベイサンズに宿泊しました。57階のプールやデッキから見る景色がとても素晴らしく、さらに55階のジムにはトレーニング機器やジャグジー、サウナが完備されていました。高級ブランドが多く並ぶ商業施設はとても広く、品揃えがよかったです（ただし、マーライオンクッキーは売っていないのでオーチャードにある高島屋のデパ地下で買うのがベストです）。ベイサンズでは、自分用にTWGの紅茶を購入しました。けれどもTWGは東京にも店舗があり、日本でも買ってしまうことを帰国後に知りました。

今回の巡検ではマリーナ地区を中心に市内を見てきました。Google Earth では静止画像しか見られないですが、この巡検を通して現地の人々の生活や人情などに接して、現地に行かなければ実感できないことの多さを痛感しました。現地を訪れる大切さを改めて感じた巡検でした。

(地域政策学部地域政策学科 3 年・大路真央)

今回のシンガポール巡検は、私にとって初めての海外であり非常に緊張しました。シンガポールでは、ガムの持ち込みが禁止され、公共交通機関内での飲食が禁止されているので、これらの点に注意しながら現地に向かいました。シンガポールのチャンギ国際空港では前の人がどのように入国審査を受けているか、注意深く観察しつつ自分の順番を待ち、入国を果たしました。空港から市内までは MRT (Mass Rapid Transit) で移動しました。MRT の一部の路線では運転士が乗車せず自動運転が実施されています。駅構内では人身事故を防止するためにホームドアが設置されているなど、東京の地下鉄よりも先進的な取り組みがされていました。

ゼミで事前に出された課題に取り組むため、班に分かれて行動しました。私たちの班の課題は東京大都市圏とシンガポール大都市圏の郊外住宅地を比較するというものです。そこで私たちは、シンガポール中心部から MRT で 30 分ほどの「アン・モーキオ」という地区に向かいました (写真 1)。アン・モーキオ駅は平日にもかかわらず多くの人で賑わっていました。駅周辺は日本と同じくアパートが建ち並んでいました。住宅街のバス停にはいずれもしっかりと屋根がついていて、アパートから傘を使わずにバスに乗れるようになっていました。昨年、ゼミのメンバーと一緒に訪れた多摩ニュー

タウンと比較すると、地形的には平坦で、バスや MRT などの公共交通機関があり、暮らしやすそうに感じました。



<写真1 アン・モーキオ駅の周辺>

ホテルは連泊をせず、一泊ごとに別のホテルに泊まりました。一日目は「マリーナ・マンダリン」というホテルでロビーも客室も綺麗なホテルでした。しかし、私たちはチェックイン時になかなか意思疎通できず、言葉の壁を感じました。二日目のホテルはシンガポールで有名な「マリーナ・ベイ・サンズ」というホテルでした (写真 2)。床は綺麗に磨かれ、宿泊客に対して丁寧に接するホテルのスタッフは一流だと感じました。ただし、巡検初日からお腹の調子がよくなかった私は、トイレに関しては日本の方が優れていると感じました。なぜなら、シンガポールの一流ホテルといえども、温水洗浄便座がついていなかったからです。どうしてこんなに便利な家電が世界で普及しないのか不思議に思いました。



<写真2 マリーナ・ベイ・サンズの遠景>

シンガポール滞在中、食事に苦労させられました。ほとんどの食事はフードコートで済ませました。そこにはさまざまな国の料理が売られていて、馴染みのない料理やパクチーを使った料理がありました。その中で、私は一番食べや

すようなカレーを好んで選びました。カレーといっても日本の「カレーライス」とは違い、ナンとタイ米にカレーを付けて食べるインドカレーです。宗教上の配慮からビーフカレーやポークカレーは無く、チキンカレーやベジタブルカレーが主流のようです。

今回の巡検では人や文化、食、言葉の違いに触れられる貴重な体験ができました。これらの経験は私自身にとって新たな価値観や考え方を得る上で良い機会になりました。機会があれば、ほかの国にも行ってみたいです

(地域政策学部地域政策学科 3 年・

板垣大治郎)

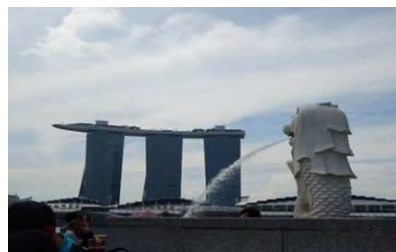
私たちが所属しているゼミでは、9月上旬にシンガポールへ2泊3日のゼミ合宿に行きました。

9月のシンガポールは、乾季にあたるので少雨ですが、スコールは頻繁にあります。私たちが訪れたときも、朝方スコールに見舞われました。ただし、日中は雨が降らず、湿度こそ高かったものの、好天に恵まれました。

チャンギ国際空港に早朝6時に到着し、そのままホテルに荷物を預け、寝不足な体に鞭を打ちながら（睡眠時間はわずか1時間！）、まず向かったのは、もちろん「マーライオン」がいるマーライオンパーク。世間では世界3大がっかり名所の1つに挙げられますが、私自身は全くそんなことなく、マーライオンを見た瞬間「これがあのマーライオンか！」とテンションが上がったのと同時に、シンガポールに来たんだなあ、改めて実感しました。

そしてマーライオンの目の前に広がる湾の対岸には、かの有名なホテルである「マリーナベイサンズ」が望めます。実は私たちの2日目の宿泊先は、そのマリーナベイサンズでし

た。「せっかくシンガポールに行くなら泊ろう！」とゼミ生の全員一致で宿泊することを決めました。マリーナベイサンズといえば、ホテルの上の乗っている「船」が有名です(写真1)。



<写真1

マーライオンから望むマリーナベイサンズ>

そこには展望デッキと屋上プールがあり、宿泊者は誰でも利用できます。もちろん私も屋上に行きました。そこに広がる景色は壮観で、シンガポール全体を見渡すことができました。美しい景観を眺めていると、シンガポールには実に多くの高層建築物が立地していることに気づきます。一見すると、ビル群が無秩序に乱立しているように見えますが、よくよく観察してみるとオフィス街、ホテル街、住宅街といったようにゾーニングがしっかり決められています。ちなみに屋上から見渡す夜景はまさに絶景で、こんなに素晴らしい夜景を見るのは生まれて初めてでした(写真2)。



<写真2 マリーナ地区の夜景>

シンガポールは東南アジア系、中華系、インド系など、さまざまな人種が住んでおり、チャイナタウンとリトルインディアを訪れた際、チャイナタウンでは築20~30年くらいの古いマ

ンションがいくつも建っていたり、リトルインディアでは市場にドリアンが売られていたり、街の中にモスクもありました。それぞれのエスニックタウンがとても特徴的で、シンガポールが多民族国家であることを実感しました。また、この2つの街はわずか3駅しか離れておらず、国土の狭いシンガポールでは、異なる民族が肩を寄せ合いながら生活していることも理解しました。

今回のシンガポール巡検は、2泊3日の強行軍であり、訪れることのできなかつた場所がたくさんあります。再訪する機会があれば、もう少しゆっくりとシンガポールを巡ってみたいと思います。大学生のうちに、もう1カ国くらい海外に足を伸ばしてみたいので、まずはコツコツとお金を貯めたいです。

(地域政策学部地域政策学科3年・樋口浩太)

私は今回の海外巡検で、中国とシンガポールを訪れました。このレポートでは、経由地で訪れた中国について書いてみたいと思います。巡検の集合場所はシンガポールでしたので、あえて直行便を利用せず、中国経由の便を利用して目的地へ向かいました。往路の経由地は成都、復路の経由地は北京です。

まず中国の交通事情ですが、率直に言って極めて自動車の通行が多く、歩行者が道路を横断するのもままならない状況でした。



上の写真は北京市郊外の大通りの交差点で

す。自動車は信号が赤でも右折ができるため、歩行者の間を縫うように走り抜けます。自分も実際に横断したところ、1度青信号をやり過ごし、2度目の青信号でようやく横断できるほど横断が困難な状況でした。中国はいわゆる自動車優先社会で、北京もさることながら、内陸の地方都市である成都でも、24時間クラクションが鳴りやむことがないほど、通行量が多い印象を受けました。

加えて、北京郊外の歩道は舗装が剥がれている、あるいは舗装がされていない箇所が多く、小さな子供や足の不自由な人、高齢者にとって歩きやすい状況とは言えませんでした。一方、自動車交通はとても便利で安価です。特にタクシーは非常に台数が多く、空港では行列を作り、街中では頻りに往来していました。成都でタクシーに乗車した際、豪雨の中、一般道にもかかわらず、時速100km以上で走行して、15分ほどかかる道程を10分ほどで激走していました。

つぎに人々の生活と彼らの居住地について感想を述べてみたいと思います。中国は昨今の日中関係からすると、日本からの来訪者にどのような反応を示すのか、いささか不安でしたが、ほとんどの人々はとても温厚に接してくれました。成都では筆談を交えて雑談し、北京では私が向かう行き先を道案内してくれました。ただし残念なことに、和やかな事ばかりではありませんでした。あるスーパーマーケットのテレビでは、反日ドラマが放映されていて、ちょうど画面の中では旧日本軍の軍人が中国人を拷問しているシーンが映し出されていました。友好的で親切な人が多い中で、中国国内に滞在している以上、日本人は一定の配慮と謙虚さが必要であると考えさせられました。また、成都の空港ではタクシー会社のスタッフと名乗る

女性が、タクシー代金のデポジットと称して、110 元ほどの現金を要求してくるトラブルに遭遇しました。海外では国内にいる以上に慎重に行動しなければならないと実感しました。

続いて居住地ですが、成都でも北京でも居住地は高層住宅が多いように感じました。しかし、それら高層住宅の中には煉瓦造りのものが少なくなく、老朽化が進んでいるようでした。帰国後、中国人の友人に尋ねたところ、これらの住宅には中流階層が主に居住しているとのことでした。一方、中流階層が集住する高層住宅の傍らにバラック小屋の様な建物が点在していました。そこには地方からやってきた出稼ぎ労働者が中華料理店を営業したり、ガチョウの様な鳥を飼育しているという光景が広がっていました。まるで中国における格差社会の縮図がそこにあるかのように感じました。

今回の海外巡検で 2 国をめぐり、それぞれの国の特色を学びました。これまでインターネットや伝聞でしか知らなかった世界を目の当たりにて、イメージや固定観念だけで判断してきた考え方が大きく変わりました。特に、両国で多くの人々と交流できたことは、何物にも勝る貴重な経験になりました。世界は広く、まだまだ知らない国や地域がたくさんあります。今後も国内外に足を運び、自分の目で現実を知るフィールドワークの思考を養っていきたいと思います。

(地域政策学部地域政策学科 3 年・細川 遼)

私はゼミ生で企画した栃木県宇都宮市への日帰り旅行について書こうと思います。

栃木県宇都宮市は関東平野の北端、栃木県のほぼ中央に位置する、人口約 52 万人の都市です。私が住んでいる高崎市から高速道路を利用して車で 2 時間ほどの距離でした。

宇都宮市に到着して、まず餃子を食べに行きました(写真 1)。私たちが行った餃子店は焼き餃子と水餃子のみ取り扱っているお店でした。私が今まで食べてきた餃子は、ラーメンとセットになっていたりと、餃子定食など、ごはんと一緒に食べるものでした。宇都宮餃子はそうではなく、餃子だけをモクモクと食べるというもので、私にとって初めての体験でした。また、餃子のタレを作る際、酢と醤油の分量を自分好みで作るのが難しかったです。後で調べてみると、「宇都宮市民流のタレ」は酢とラー油が多めだそうです。今回はこの食べ方で挑戦してみたいと思います。



<写真 1 宇都宮餃子>

餃子を食べた後は、今回の旅行の目的地である大谷資料館に行きました。大谷資料館には、地下採掘場跡があり、1919 年から 1986 年まで大谷石を掘り出していました。掘り出しの結果、巨大な地下空間が形成され、その広さは野球場が一つ入るほどの大きさ(約 2 万㎡)になるそうです。この地下空間は戦争中、陸軍の糧秣廠・被服廠の地下秘密倉庫として利用され、1945 年になると、中島飛行場の地下軍需工場として使われました。戦後は年間平均気温 8 度という涼しさを活かして、政府米の貯蔵庫として利用されました。現在は、コンサート会場や美術館、演劇場、教会など、多目的ホールとして活用されています。

早速、私たちも地下空間へ降りてみました。階段を下りていくほど地下 30m からの冷気が

肌に当たります。この日の宇都宮市の気温は約30度でしたが、地下空間の気温は約12度で、半袖では風邪をひいてしまうほどの寒さでした。地下空間にはオブジェが展示してあったり、照明による演出がされてあったり、幻想的な雰囲気醸し出していました。この独特な雰囲気はドラマや映画、PVなどの撮影でも利用されているそうで、例えば、2001年に日本テレビで放送された『金田一少年の事件簿』の撮影でも使われました。

地下空間の見学を一通り終えて、地上へ戻ろうと降りてきた階段をゼミ生と「つらい！つらい！！」と言いながら登っていきました。階段を登っている途中、ユーマアたっぷりの看板を見つけたときは、みんなで大笑いしてしまいました（写真2）。



<写真2 宇都宮餃子>

今回訪れた宇都宮市は、餃子やジャズで有名ですが、調べてみると、さまざまな観光資源があることに気づきました。私は観光資源からみた地域イメージの形成に興味を持ち、卒業論文などでより深く勉強していきたいと思っています。

(地域政策学部地域政策学科3年・西 遥香)

地域科学研究所動静

- ・2016年7月20日付で、本研究所の総務企画委員長に尾形 祥所員（経済学部准教授）が就任しました。
- ・今年度から開始した研究プロジェクト「空家特別措置法施行後の空き家対策に関する総合的研究」（代表者：岩崎 忠所員）では、7月から9月にかけて3回の公開講演会を開催しました。第1回は、7月30日（土）に富士通総研主席研究員の米山秀隆氏が住宅・土地政策について、第2回は8月27日（土）に上智大学法科大学院教授 北村喜宣氏が公法の立場から、第3回は9月3日（土）に早稲田大学大学院法務研究科教授の西口元氏が私法の立場からそれぞれ講演されました。
- ・今年度開始のもう一つの研究プロジェクト「富岡製糸場と群馬の製糸業Ⅱ」（代表者：佐滝剛弘特命教授）では、10月5日（水）に研究会を開催しました。本研究所の発足プロジェクトにも加わっていただいた東京大学名誉教授 石井寛治氏を招き、プロジェクトメンバーによる研究報告と討論を行いました。
- ・昨年度刊行した研究プロジェクト報告書『自由貿易下における農業・農村の再生』（代表者：宮田剛志所員）の合評会を12月10日（土）に開催しました。明治大学農学部准教授 橋口卓也氏を評者に、執筆者による研究報告も行われました。

* * * *

編集後記

地域科学研究所は、開設されて 2 回目の年越しを間近にし、暗中模索が続いてきた研究所の運営は、やっと軌道に乗り出した感があります。地域科学研究所の使命は、経済学、経営学、地域政策学の基礎的な研究をベースとしながら、公立大学法人の 1 機関として、これまで以上に地域貢献を果たしていくことにあります。

2015 年度における所員会議での検討を経て、市民、県民を対象とした公開講座の春、秋の 2 期開講、合併により広域化した高崎市の歴史や現状を現地に出かけて学ぶ地域めぐり(エクスカーション)の新設、市民の地道な研究成果を共に学習する地元学講座の新設、そして自治体職員を対象とした地域経営セミナーが地域貢献事業として決定され、2016 年度はこれらを実施しました。

本号で報告されていますように、所員の先生方に土曜日に開講いただいた公開講座の春開講(今年は会場の都合から 6 月～8 月開講となりました)、高崎市の水や食品リサイクルをテーマとした地域めぐりは概ね評判がよかったです。そして大学のある上並榎町の人々が中心となった「長野堰を語りつぐ会」の皆様が 10 年来、地道に研究を重ねてこられました「長野堰」をテーマとした地元学講座は、タイミング良く長野堰が「世界かんがい施設遺産」に登録されたこともあり、大学で行われた「長野堰を語りつぐ会」の方を講師とした講演会、榛名湖から市街地にある円筒分水堰までを見学して廻ったツアーに多くの市民の皆さんに参加いただき、熱心に勉強していただきました。一方、自治体職員の研修を目的とした地域経営セミナーは、行政学と財政学の専門家を講師に招いて、高崎市役所、群馬県庁を中心とする県内

の自治体の職員さんをはじめ、遠くは長野県飯田市や静岡県浜松市からの参加者を得て、充実した研修をしていただきました。新規事業は、概ね高い評価をいただいたようであり、主催者としては事業企画の方向性は間違っていなかったと安堵いたしました。来年度に向け、皆様からのご要望をお寄せください。

基礎研究では、研究所の紀要『産業研究』は今年度の第 1 号が刊行され、第 2 号は現在、論文の提出待ちの状況にあります。旧産業研究所の最終研究プロジェクトである仮題『地方都市における製造業の地域的展開と現状－高崎市における中小企業の躍動－』についても、研究メンバーの先生方が原稿の仕上げに邁進していただいているようです。昨今の大学は、何かと多忙で、執筆メンバーの先生方には過大な負担をかけていますが、地方経済の衰退が叫ばれる中、地道な企業活動によって地域経済の担い手となっていただいている地域の中小企業にスポットを当てるのは重要な研究だと考えています。私も講義が終わったら、原稿の執筆に取りかかります。ここ 10 数年、抱えている原稿がゼロという元旦を迎えたことはなく、これは研究者の宿命と心得ております。(TN)

高崎経済大学地域科学研究所

ニューズレター No.4

発行 2016 年 12 月 22 日

群馬県高崎市上並榎町 1300(〒370-0801)

TEL(027)344-6267 FAX(027)343-7103

E-mail : chiikikagaku@tcue.ac.jp

©TIRS